【銀河鉄道の夜（仮）】

1. 現実

電車の走行音

電車の止まる音

ジョバンニ　どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもっとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。

ジョバンニの頭上に星が灯る

電車の走行音

ザネリ、ジョバンニを冷やかす

ジョバンニ　ザネリ、烏瓜ながしに行くの。綺麗な星だもんね。お祭りに行くのかい。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ジョバンニ　何だい。ザネリ。父さんならまだ帰ってこないよ。でもきっと帰ってくるんだ。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ジョバンニ涙を拭いて、空を見上げる。

ジョバンニ　お母さん（おっかさん）、今帰ったよ。具合はどう？　そう、薬が効いたんだねぇ

ジョバンニ、母の近くの窓を開ける。

ジョバンニ　お母さん、角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげる。姉さんは帰ったの。ああ、この辺が綺麗になってるねえ。このトマトは姉さんが持ってきたのかな。おいしそうだねえ。お母さん、牛乳は……

ジョバンニ　お母さん、牛乳は来てないかい

ジョバンニ　そう、じゃあ僕が取ってくるよ。

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　ぼく、お父さんはきっと間もなく帰ってくると思うよ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　今朝の新聞に、今年は漁が大へんよかったって書いてあったよ。だからきっと間もなく帰ってくるよ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　もう、窓を閉めておこうか。お母さん。お父さんはきっと、きっと漁

に出ているよ。お父さんが監獄に入るようなそんな悪いことをしたはずがないんだから。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。はははははは

ジョバンニ　この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲らだのトナカイの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ジョバンニ　みんな、僕に会うとそれを言うよ。冷やかすように言うんだ。

ジョバンニ　うん。みんな僕に、悪口を言うんだ。

ジョバンニ　お母さん、ぼく、牛乳を取ってくるよ。

ジョバンニ　うん。そうだねぇ、お祭りも見てくるから、きっと一時間半で帰ってくるよ。

電車の走行音

2. 銀河鉄道（白鳥の停車場）

ナレーション　銀河ステーション、銀河ステーション

ジョバンニの頭上の星が明るくなる

カムパネルラ　冬と銀河ステーション

ジョバンニ　ソラには塵のやうに小鳥が飛び　カゲロウや青いギリシヤ文字は
せわしく野はらの雪に燃えます
パッセン大街道のヒノキからは　凍った雫が燦々と降り
銀河ステーションの遠方シグナルも　今朝は真っ赤に澱んでいます
川はどんどんザエを流しているのに　皆は生ゴムの長靴をはき
狐や犬の毛皮を着て　陶器の露店をひやかしたり
ぶらさがった章魚を品定めしたりする
あのにぎやかな土沢の冬の市日です

カムパネルラ　はんの木とまばゆい雲のアルコホル
あすこにやどりぎの黄金のゴールが
さめざめとして光ってもいい

ジョバンニ　あぁ　Josef Pasternack（ジョセフ・パスターナック）の指揮する
この冬の銀河軽便鉄道は　幾重のあえかなザエをくぐり

カムパネルラ　電信柱の赤いガイシと松の森

ジョバンニ　にせものの金のメタルをぶらさげて　茶色の瞳をりんと張り
つめたく青らむ天椀の下　うららかな雪の台地を急ぐもの

カムパネルラ　窓のガラスのザエのシダは　だんだん白い湯気に変わる

ジョバンニ　パッセン大街道のヒノキから　雫は燃えて一面に降り
はねあがる青い枝や　紅玉やトパースまたいろいろのスペクトルや
もうまるで市場のやうな盛んな取引です

ジョバンニ、列車の席に座っている。外は星空。見慣れない光景。

ジョバンニ、前の席のカムパネルラに気が付く。声をかけようとして

カムパネルラ　みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、
ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。

カムパネルラ、ジョバンニの隣に座る

ジョバンニ　何処かで皆を待っていたほうがいいだろうか

カムパネルラ　ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えに来たんだ。

ジョバンニ　お父さん。

カムパネルラ　ああ！　しまったな。ぼく、水筒を忘れてきちゃった。スケッチブッ
クも置いてきちゃったな。

ジョバンニ　あはは。なんだか僕も、何か忘れてきた気がするよ。

カムパネルラ　ほんとう？　でも構わないよ。もうじき白鳥の停車場なんだ。ぼく、白鳥を見るのが好き。天の川の向こうに飛んでいたって、きっと見えるよ。

カムパネルラ、黒曜石の地図（星座早見表）を開く

ジョバンニ　この地図、どこで買ったの？　黒曜石で出来てるねぇ

カムパネルラ　銀河ステーションで貰ったんだよ。もらわなかったの。

ジョバンニ　（地図を見ながら）銀河ステーションはどこだろう。今僕たちはどこにいるんだろう。

星明かりが強くなる

ジョバンニ　ぼくらもう天の原に来たね。あの河原は月夜かなぁ

カムパネルラ　月夜じゃないよ。銀河だから光るんだよ。

ジョバンニ　この汽車、石炭を焚いてないね。

カムパネルラ　アルコールか電気だろう。

ジョバンニ　りんどうの花が咲いているよ。すっかり秋だね。さっと飛び降りて一輪取ってこようか。

カムパネルラ　ダメだよ。ほら、もうあんなに遠くに行っちゃったよ。

電車の走行音

ナレーション　まもなく白鳥の停車場、白鳥の停車場

ジョバンニ　白鳥、楽しみだねぇ

カムパネルラ　十一時きっかりには着くんだよ

時計の音

ジョバンニ　ぼくらも降りてみようか

カムパネルラ　そうだね。降りてみよう。

電車の停車音

ジョバンニ、カムパネルラ、席から立ち上がり電車を降りる。

カムパネルラ　南から　また東から　ぬるんだ風が吹いてきて

くるほしく春をはらんだ黒雲が　いくつもの野ばらの藪を渉って行く

ジョバンニ　ひばりと川と　台地の上には　いっぱいに種苗を積んだ汽車の音

カムパネルラ　この砂、みんな水晶だ、中で小さな火が燃えているよ

ジョバンニ　そうだね。あっちへ行ってみようよ。

カムパネルラ　ああ、変なものがあるよ

ジョバンニ　くるみの実だよ。沢山ある。流れてきたんじゃない。岩の中に入ってるんだ。

カムパネルラ　大きいね。このくるみ、倍はあるね。少しも傷んでない。ああ、みて、あそこに誰かいるよ！

ジョバンニ　何かを彫っているみたいだねぇ。大学士の人だろうか。きっとくるみを掘っているんだよ。僕たちも手伝おうか（大きく手を振る）ああ、手伝ってもいいってさ。

カムパネルラ　これはざっと百二十万年前くらいのくるみだね。そこの突起を壊さないようにしなくっちゃ。もっと遠くから掘ろうよ。乱暴はしないようにね。

ジョバンニ　これは標本にするのかな

カムパネルラ　いや、きっと証明するのに要るのさ。ここは百二十万年前、第三世紀の後のころは海岸だった。この下からは貝殻も出る。いま川の流れているところに塩水が寄せたり引いたりしていたんだ。ぼくたちから見るとここは厚い立派な地層で百二十万年前にできたという証拠もあるんだけれど、僕たちとは違ったやつから見ても立派な地層に見えるか

どうか、証明するのに要るんだ。

ジョバンニ　どうしてそんなことを知っているの？

カムパネルラ　地図に載っていたのさ。本当かどうかはわからないけどね。

カムパネルラ、ジョバンニ、くるみを拾う

ジョバンニ　わぁ！　肋骨が出てきたぞ！

列車の汽笛音

カムパネルラ　もう時間だ。

ジョバンニ　私どもは失礼いたします！　（大きく手を振る）

カムパネルラ、ジョバンニ、列車の席に座る

ジョバンニ　みて、カムパネルラ。あの人はまだくるみを取っているよ

カムパネルラ　本当だねぇ

星明かりが消えるまで大学士に手を振る。

電車の走行音、

3．記憶の中（活版所）

カムパネルラ　あっちもこっちも　ひとさわぎおこして

いっぱい呑みたいやつらばかりだ

羊歯の葉と雲

世界はそんなにつめたく暗い

けれどもまもなく　さういふやつらは

ひとりで腐って　ひとりで雨に流される

あとはしんとした青い羊歯ばかり

そしてそれが人間の石炭紀であったと

どこかの透明な地質学者が記録するであらう

カムパネルラ、退場

ジョバンニの頭上の星明かりが暗くなる。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

音が止む。ジョバンニ、虫めがねを使いながら文選工の仕事をしている。

文選工たちの笑い声が響く

文選工　よお、虫めがね君。たいへんだねえ、がくせいさんは。俺達なんざより利口で良いようだあね。がんばりたまえよお。

ジョバンニ、涙をぬぐいながら文字を拾う

文選工　ところで父ちゃんは帰ってきたのかい。らっこの上着は、来たのかい。なぁ、虫めがね君。

文選工たちは笑う。時計の鐘が鳴る。

ジョバンニは椅子から立ち上がり仕事を終える。

銀貨を貰い、ジョバンニ退場する。パンと角砂糖を買って出てくる。

ジョバンニひとりでに転ぶ。ジョバンニ、パンを落とす。

文選工、の笑い声。

ジョバンニ、空を見上げる。パンの砂を払う。退場する。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

文選工　ところで父ちゃんは帰ってきたのかい。らっこの上着は、来たのかい。なぁ、虫めがね君。

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

列車の汽笛が鳴る。

カムパネルラ、戻ってくる。

カムパネルラ　雨にも負けず　風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫な体を持ち　慾は無く
決して怒らず　いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と　味噌と少しの野菜を食べ

ジョバンニ　あらゆることを　自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり　そして忘れず

カムパネルラ　野原の松の林の蔭の　小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子ども有れば　行って看病してやり
西に疲れた母あれば　行ってその稲の束を負い

南に死にそうな人あれば　行って怖がらなくてもいいと言い

ジョバンニ　北に喧嘩や訴訟があれば　つまらないから辞めろと言い

カムパネルラ　日照りの時は涙を流し　寒さの夏はオロオロ歩き

皆にでくの坊と呼ばれ　褒められもせず

ジョバンニ　苦にもされず

カム&ジョ　そういうものに私はなりたい

4. 銀河鉄道（鳥を捕る人）

赤ひげ、登場。

赤ひげ　ここへかけてもようございますか。

ジョバンニ　ええ、どうぞ。

赤ひげ、荷物を網棚にのせ、ジョバンニとカムパネルラに向かい合って座る

赤ひげ　あなた方はどちらへいらっしゃるんですか

ジョバンニ　どこまでもいくんです。

赤ひげ　そいつはいい。この汽車はじっさい、どこまででも行きますぜ

カムパネルラ　あなたはどこへ行くんです

赤ひげ　わしはすぐそこで降ります。鳥を捕まえに行くんです。

カムパネルラ　何鳥ですか

赤ひげ　ツルやガン、サギや白鳥です

ジョバンニ　ツルは沢山いますか

赤ひげ　いますとも、いますとも。さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。今でも聞こえるじゃありませんか。そら、耳を澄まして聞いてごらんなさい。

水の音が流れる

ジョバンニ　どうして鳥を捕るんですか。標本ですか。

赤ひげ　標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。

カムパネルラ　おかしいねえ。ツルやサギをですか。どうやって。

赤ひげ　そいつはな、雑作ない。サギというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるとこを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。

あとはもう、わかり切ってまさあ。押し葉にするだけです。おかしいも不審もありませんや。そら。さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです（赤ひげ網棚から荷物を取り、鳥を見せる）

カムパネルラ　目を瞑ってるね

ジョバンニ　美味しいんですか

赤ひげ　毎日注文があります。こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。

ジョバンニ、カムパネルラ、鳥を食べる。チョコレートっぽい。

赤ひげ　今年の渡り鳥は景気がいい。素敵なもんだ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまって、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしぁ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持って来たって仕方がねえや、大将へやれって、こう云ってやりましたがね、はっは。

カムパネルラ　こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう

赤ひげ　はっはっは。（鳥をしまい始める）どうもからだにちょうど合うほど

稼いでいるくらい、いいことはありませんなあ。ところで、あなたがたはどちらからおいでなんですか

ジョバンニ、カムパネルラ、黙る

赤ひげ　　ああ、遠くからですね（大きくうなずく）

列車の汽笛が鳴る

赤ひげ　　もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。あれは、水の速さをはかる器械です。水も

車掌　　切符を拝見いたします

カムパネルラと赤ひげ、切符を出す。

車掌、切符に切り込みを入れる。

車掌　　あなたのは？

ジョバンニ、服のポケットを探る。上着に緑色のハガキが入っている。

やっちまえと思いながら差し出す。車掌は驚いた顔をする。

車掌　　これは三次空間の方からお持ちになったのですか

ジョバンニ　　何だかわかりません

車掌　よろしゅうございます。サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。

車掌が切符を返却する。赤ひげとカムパネルラは覗き込む

赤ひげ　おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれぁ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた大したもんですね

ジョバンニとカムパネルラ、赤ひげを無視して窓の外を見る

赤ひげ、退場

カムパネルラ　もうじきワシの停車場だね（地図を見ながら）

ジョバンニ、赤ひげを探し出す

カムパネルラ　あの人、何処へ行ったんだろう

ジョバンニ　ほんとう。どこへ行ったろう。一体、どこかでまた会うのかな。僕、あの人に物を言わなかった。

カムパネルラ　なんだか悪いことをしたかな

ジョバンニ　ぼく、あの人が邪魔なような気がしたんだ。悪いことをしたろうか。
なんだか心地が悪いや。

カムパネルラ、床に一枚の銀貨を見つける。ジョバンニに手渡す。

カムパネルラ　ねぇ、何か落ちているよ。きみの物じゃないかい。

ジョバンニ　ああ、銀貨だ。けれど僕の物かわからないよ。

カムパネルラ　あの人の物かな、僕には必要のないだから。また今度車掌さんが来た
ときに預けようか。

ジョバンニ　そうだ、それがいい（ポケットの中に仕舞う）

星明かりが暗くなる

5．記憶の中（学校）

カムパネルラ　いまは燃えつきた瞳も痛み　眼路も綾だち酸える
ともだちよ　世界はみんな
青いいろした脂肪ではないだらうか

カムパネルラ、前の先に座る

先生　ではみなさんは、そういうふうに川だと云いわれたり、乳の流れたあ
とだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何か

ご承知ですか

カムパネルラ、手を上げる。ジョバンニ、手を挙げるが、すぐに下ろす

先生　ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょう

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

先生　大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう

ジョバンニ、答えない（もじもじしている）

クラスの笑い声

先生　はあ。しようがないですね。ではカムパネルラさん

カムパネルラ、立ち上がるが、答えない。

先生　……このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。

ジョバンニ、頷く。頷いたまま下を見る。

先生　ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利じゃりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを大きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでい

る脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮うかんでいるのです。私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒、星しか見えないのでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれが今日の銀河の説なのです。（次第に先生の声をフェードアウトさせていく）

ジョバンニ

そうだ僕は知っていたんだ。勿論カムパネルラも知っていた。それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあった。それどこでなくカムパネルラ

は、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎からおおきな本をもってきて、銀河というところをひろげ、まっ黒なページいっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見た。だけどもどうして、僕にはそれが、わかるようで、わからない気がしたんだ。

ジョバンニ、カムパネルラ、着席する

先生　このレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですから次の理科の時間にお話します。今日は銀河のお祭、ケンタウル祭ですね。みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。

クラスの笑い声が大きくなっていく

6. 銀河鉄道（ほんとうのさいわい）

ジョバンニ　なんだかリンゴの匂いがする。僕がいまリンゴのことを考えたためだろうか。

カムパネルラ　ほんとうにリンゴの匂いだよ。野ばらの匂いもするね。

女の子　あら、ここはどこでしょう。まあきれいだわ！

青年　僕たちは空へ来たんだ。私達は天へ行くのですよ。御覧なさい。あの

しるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。

女の子が青年をジョバンニとカムパネルラの前の席に座らせる。

女の子　私はお母さんのとこへ行くのよ。

青年　お父さんやねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでしょう。きっと今頃Ora Orade Shitori egumo（おらおらで一人いぐも）なんて歌ってね。雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるニワトコの藪を回って遊んでいるだろうかと考えたり心配してらっしゃることよ。早く行っておっかさんにお目にかかりましょうね。

女の子　うん、だけど私、船に乗らなければよかったかしら

青年　ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター　をうたってやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。私達はもうなんにも悲しいことないのです。私達はこんないいとこを旅し

て、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そして私たちの代りにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう。

カムパネルラ　あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか

青年　いえ、氷山にぶっつかって船が沈みましてね。私は大学へはいっていて、彼女の家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶっつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。救命ボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか彼女を乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供のために祈ってくれました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。私はどうしてもこの方をお助けするのが私の義

務だと思いましたから前にいる子供らを押しのけようとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前に行く方がほんとうにこの方の幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪は私一人で背負ってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船が沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども滑ってずうっと向うへ行ってしまいました。私は一生けん命で甲板の格子になったとこをはなして、二人それにしっかりとりつきました。どこからともなく声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄に大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思いながらしっかりこの人をだいてそれからぼうっとしたと思ったらもうここへ来ていたのです。この方のお母さんは一昨年没なくなられました。ええボートはきっと助かったにちがいありません、何せよほ

ど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから

ジョバンニ　ああ、その船は……（ジョバンニ口をつぐんで落ち込む）

女の子　お母さま（窓の外を眺めている）

青年　なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれが正しいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです

カムパネルラ　いかがですか。先ほど燈台看守に頂いたんです。こういうリンゴは初めてでしょう。

青年　ええ、立派ですね。ここではこんなリンゴができるんですか。

青年、一口食べる。女の子にリンゴをあげる。

女の子、リンゴを食べる。

女の子　ああ私いまお母さんのことを思いだしていたのよ。お母さんがね立派な戸棚と本のあるとこに居てね、私の方を見て手をだしてにこにこにこにこわらって。私、お母さん。りんごをひろってきてあげましょうかと云ったの。ああ、でもここはさっきの汽車のなかだわ

女の子　あら、あれはカラスかしら。

カムパネルラ　カラスでない。みんなカササギだ。

青年　カササギですね。頭の後ろに毛がぴんと伸びています。

ジョバンニ、少し気まずそうにしている。カムパネルラに話しかけようとする

カムパネルラ　クジャクがいるよ

女の子　沢山いるわ

ジョバンニ　鳥が飛んでいくな。

女の子　まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。あら、あの人は鳥へ何を教えているんでしょう（カムパネルラに向けて言う）

カムパネルラ　わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。

讃美歌が流れ始める。青年は青い顔をしている。

カムパネルラ　あれはとうもろこしだねえ（ジョバンニへ向けて言う）

ジョバンニ　そうだろうね（不愛想に返す）

青年、一度立ち上がる。

青年　あゝ今日ここに果てんとや
燃ゆるねがひはありながら
外のわざにのみまぎらひて
十年はつひに過ぎにけり
懺悔の汗に身をば燃し
もだえの血をば吐きながら
たゞねがふらく蝕みし
この身捧げん壇あれと

女の子は祈っている。

新世界交響楽が流れ出す。

女の子　ああ、新世界交響楽だわ。あら、インディアン。インディアンです。
御覧なさい。

ジョバンニとカムパネルラが立ち上がる。

女の子　走ってるわ。追いかけているのかしら。

青年　いいえ、いいえ、汽車を追ってるんじゃないですよ。猟をするか踊っ

ているかしているんでしょう。（黒曜石の地図を確認する）ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう

電車の走行音が大きくなっていく。

赤い星が強く光り始める。

ジョバンニ　あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう

カムパネルラ　サソリの火だ

女の子　あら、サソリの火のことならあたし知ってるわ。

ジョバンニ　サソリの火ってなんだい。

女の子　サソリがやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。

ジョバンニ　サソリって、虫だろう。

女の子　ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。

ジョバンニ　サソリいい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあってそれでさされると死ぬって先生が云ったよ。

女の子　そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんこう云ったのよ。

青年　バルドラの野原に一ぴきの蝎がいて小さな虫なんか殺してたべて生きていました。するとある日イタチに見つかって食べられそうになりました。サソリは一生けん命にげてにげて。にげたけどとうとうイタチに押えられそうになりました。そのときいきなり前に井戸が現れたのです。サソリは真っ逆さまにその中に落ちてしまいました。もうどうしてもあがられないでさそりは溺れていきます。そのときさそりは斯う云ってお祈りしました。

カムパネルラ　ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまってイタチにくれてやらなかったろう。そしたらイタチも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をす

てずどうかこの次にはまことのみんなのさいわいのために私のからだをおつかい下さい。

青年　そうしていつかサソリのからだはまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしました。

女の子　いまでも燃えてるってお父さん仰ったわ。

カムパネルラ　そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。

女の子　ケンタウル露をふらせ。ふらせ。ふらせ。

ジョバンニ　ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だね

カムパネルラ　ああ、ここはケンタウルの村だよ

ナレーション　まもなくサウザンクロス。サウザンクロス。

青年　さあ、おりる支度をしてください。

ジョバンニ　僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。

女の子　だけどあたしたちもうここで降りなけぁいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。

ジョバンニ　天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。

女の子　だってお母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。

ジョバンニ　そんな神さまうその神さまだい。

女の子　あなたの神さまうその神さまよ。

ジョバンニ　そうじゃないよ！

青年　あなたの神さまってどんな神さまですか。

ジョバンニ　ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。

青年　ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。

ジョバンニ　ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。

青年　だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。

青年、女の子降りる支度をする。

女の子　じゃあさよなら。またどこかで。

ジョバンニ　さよなら。

カムパネルラ　またどこかで。

赤い星が明滅する。フェードアウトしながら段々と車内が暗くなっていく。

ジョバンニ　カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、

カムパネルラ　うん、そうだねえ。（地図を取り出す）ああ、今僕たちはこんなに乗ってきたんだ。ね、ジョバンニ。もう一度切符を見せてくれよ。

ジョバンニ　いいよ。僕はこれがなんだかわからないけども、どこまでもどこまでも一緒に行こう。

カムパネルラ　すごいや、この切符はほんとうにどこまでもいけるんだ

ジョバンニ　ねぇ、カムパネルラ。覚えているかい。ぼくは学校から帰る途中たびたび君のうちに寄っていた。きみのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、かまがすっかり煤けたんだ。

カムパネルラ　ああ、覚えているよ。あの頃はよかったなあ。

ジョバンニ　うん、あの頃は良かった。カムパネルラともみんなとも沢山話せたんだから。僕はもうあのサソリのようにほんとうにみんなのさいわいのためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわないよ

カムパネルラ　うん。僕だってそうだ。

ジョバンニ　けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう

カムパネルラ　僕わからない

ジョバンニ　僕たちしっかりやろうねえ

カムパネルラ　あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ

ジョバンニ　僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。

カムパネルラ　ああきっと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあすこにいるのぼくのお母さんだよ！

ジョバンニ　お母さん。

カムパネルラ　おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。ぼくはおっかさん

が、ほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう

ジョバンニ　ぼくわからない。お母さん。何かを忘れている気がするんだ。

カムパネルラ　けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。

ジョバンニ、ポケットから銀貨を取り出す。

ジョバンニ　ああ、僕、お母さんに牛乳を取りに行くんだった。

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

カムパネルラ　ねぇ、ジョバンニ。おっかさんは、きっとぼくをゆるして下さる。ぼくはジョバンニが、ほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもするよ。

カムパネルラ、緑のハガキを奪ってジョバンニを突き飛ばす。

星明かりが眩く明滅を繰り返す。ゆっくりと明滅が闇に染まっていく。

カムパネルラ、退場

ジョバンニ　カムパネルラ、カムパネルラ、僕たち、一緒に……

暗転

闇の中でたくさんの声が響く

「子どもが水へ落ちたぞ」「カムパネルラが川へ入った」「どうして、いつ」「ザネリが、ザネリが」「カムパネルラはどこに行った」「ああ、みんなきた」「まだみつからない」「ザネリは家へ連れられて行った」「水に落ちたぞ」「どうした」「どこにいった」

「カムパネルラ、カムパネルラ」……声は繰り返す

薄明かりが差し込む

車掌　もう駄目です。落ちてから四十五分たちました

ジョバンニ、咳き込みながら立ち上がる

隣にカムパネルラが緑の手紙を持ったまま横たえている

ジョバンニ　カムパネルラは川へ入った。ザネリが舟の上からうりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだそうで。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったようです。カムパネルラはすぐ飛びこんでザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。ザネリは助かった。ザネリはお父さんが迎えに来た。けれどもカムパネルラは水底の見えない闇の中に一人進んでいった。

ジョバンニ、タオルで体を拭く

ジョバンニ　なんだか夢を見ていたような心地でした。川の表面は夜空を写して、銀河のように穏やかに揺蕩いています。カムパネルラは一人、大きな闇の中に進んでいきました。

ジョバンニ、ボロボロになった緑のハガキをカムパネルラから取る。

ジョバンニ、上を見上げる

ジョバンニ　空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕は、僕はもう、銀河鉄道には乗れない。